〔日本書紀二神代〕豐玉姬果如前期、將其女弟玉依姬、直冒風波、來到海邊、逮臨產屋、請曰、妾產時幸勿以看之、天孫猶不能忍、竊往覘之、豐玉姬方產、化爲龍、而甚慙之曰、如有不辱我者、則使海陸相通永无隔絕、今既辱之、將何以結親昵之情乎、乃以草裹兒棄之海邊、閉海途而徑去矣、故因以名兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、

一云○略中天孫心怪其言、竊覘之、則化爲八尋大鰐、○略下

〔日本書紀纂疏八〕豐玉姬化爲八尋大熊鰐、○略中問、海女不爲龍蛇而化鰐何也、答、龍之爲畜、變化無常、已是化爲他畜、何足怪耶、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年七月丙申、京中白龍見、有暴風雨損民屋、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年六月廿三日甲戌、不雨數旬、農民失業、轉經走幣、祈請佛神、猶未得嘉澍、古老言曰、神泉苑池中有神龍、昔年炎旱、焦草礫石、決水乾池、發鐘鼓聲、應時雷雨、必然之驗也、○略下

〔扶桑略記二十二字多〕寬平元年十月朔己未、卽位之間、自乾角山中、黃龍騰天、太宰少貳清原令望、爲堰大井灘使、見之、從五位下橘有棟參梅宮之頃見之、丹波博士丹波有冬、在彼國見之、件三人慥見之、往往見多也、

〔竹取物語〕大友の御ゆきの大納言は、我家に有とある人めしあつめての給はく、龍の首に、五色の光ある玉あなり、それとりてたてまつりたらむ人には、ねがはん事をかなへむとのたまふ、男ども、仰の事を承て申さく、仰の事はいともたうとし、但此玉たはやすくえとらじ、いはんや龍の首の玉は、いかゞとらむとまうしあへり、大納言のたまふ、てんの使といはんものは、命をすてゝも、をのが君の仰ごとをば、かなへんとこそおもはへけれ、此國になき、天竺唐の物にもあらず、此國の海山より、龍はおりのぼるもの也、いかに思ひてか、なんぢら、かたき物と申べき、○略中たつのかしらの玉とりえずば、歸りくなとのたまへば、いづちも〳〵、足のむきたらむかたへいなんとす、